大腸sm癌のリンパ管侵襲におけるPodoplaninの有用性について

○橋本　康弘，野口　教彦，築山　あゆみ，黒川　和男，浦岡　孝子，郡司　有理子
藤掛　順子（（財）大阪府警察協会大阪警察病院　病理技術科），辻本　正彦
（（財）大阪府警察協会大阪警察病院　臨床病理科）

【はじめに】大腸ｓｍ癌は、全体の約10%にリンパ節転移が認められているが、その危険因子として組織型、脈管侵襲、ｓｍ浸潤度などが上げられる。その中で脈管侵襲、特にリンパ管侵襲は客観的判定が難しいと言われている。今回我々は、リンパ管を特異的に染色する抗Podoplanin抗体の有用性について検討した。

【対象と方法】当院でEMR後にsm癌と診断され、大腸切除術を施行した症例16例、および、大腸切除術後にsm癌と診断された症例31例の計47例（内リンパ節転移症例6例）について、ホルマリン固定後のパラフィン包埋切片で，Podoplanin抗体（Angio Bio Co.）を用いて、ABC法にて免疫組織化学的に染色を行った。染色後、顕微鏡にて癌の胞巣中、およびその近傍の観察を行い、癌細胞が浸潤しているリンパ管が1つでもあれば陽性とした。

【結果】脈管侵襲以外の危険因子とリンパ節転移との関係をみると、組織型では、高分化型腺癌：3/29例（10.3%）と中分化型腺癌：3/18例（16.7%）、sm浸潤度ではsm1：2/14例（14.3%）とsm2以上：4/33(12.1%)例といずれも相関は認められなかった。リンパ管侵襲ではly(+)：5/25例（20.0%）、ly(-)：1/22例（4.5%）と相関が認められた。Podoplaninでは陽性：5/34例（14.7%）、陰性例：0/12例（0%）であった。

【考察】大腸sm癌において脈管侵襲はリンパ節転移の危険因子のひとつで、明らかな脈管内癌浸潤は追加腸切除の指標とされているが、特にリンパ管は細静脈や毛細血管などとの鑑別が難しい上、EMR材料では組織の挫滅や癌周囲組織の人工的裂隙、また脈管の拡張、変形が高率にみられるので、癌のリンパ管浸潤の判定は容易ではい。今回の検討では、リンパ節転移陽性症例は全てPodplanin陽性であった。　EMRでSM癌を診断する際に、HE染色の補助的診断としてPodplaninを併用する事により、見逃しがちなリンパ管への癌の浸潤がより客観的に判定することが出来、追加腸切除をするか否かの判断材料になり得る可能性が示唆された。

連絡先：06-6771-6051（内線2264）